

—国道187号・高田川・西郷尾交差点安全施設等整備事業

咸屋敷田遺跡調査報告書

2005年3月

島根県益田市教育委員会

—国道191号道川工区特定交通安全施設等整備事業—

蔵屋敷田遺跡調査報告書

2005年3月

島根県益田市教育委員会



出土した押型・隆起文などの土器片

例　　言

1. 本書は、島根県益田土木建築事務所の委託を受けて、四見町教育委員会が平成16年度に行った国道191号道川工区新世紀道路（景観対策）事業（後に国道191号道川工区特定交通安全施設等整備事業に変更）に伴う、蔵屋敷田遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、次のような体制で実施した。

調査主体 四見町教育委員会（平成16年11月1日から益田市教育委員会）

調査員 四見町文化財保護専門員

（益田市教育委員会 文化振興課 埋蔵文化財調査専門員）

渡辺 友千代

調査員 四見町教育委員会主任主事

（益田市教育委員会 文化振興課 主任主事） 山本 浩之

調査補助員 四見町埋蔵文化財調査室

（益田市埋蔵文化財四見調査室） 栗田 美文

調査協力員 四見町埋蔵文化財調査室

（益田市埋蔵文化財四見調査室） 大賀 幸恵

大谷 真弓

調査指導員 島根県教育委員会文化財課職員

山口大学人文学部教授 中村 友博

事務局

四見町教育委員会教育長 松本 隆敏

（平成16年10月31日まで）

四見町教育委員会次長 大谷 良樹

（平成16年3月31日まで）

四見町教育委員会次長 渡辺 健一

（平成16年4月1日から）

益田市教育委員会 文化振興課長 安達 正美

（平成16年11月1日から）

益田市教育委員会 文化振興課 文化財係長 木原 光

益田市教育委員会 文化振興課 主任主事 山本 浩之

発掘作業員

栗田 修 斎藤 幸夫 藤井 一美 田中 莫

宮市 勇 森 伊佐男

遺物整理員

渡辺 聰 大賀 幸恵 初田 路美 藤井 美樹

大谷 真弓 上原 弓子

3. 調査に際しては、島根県益田土木建築事務所匹見出張所の野村恒男所長をはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただき、また山口大学人文学部の中村友博教授、そして立命館大学文学部の矢野健一助教授らから、一方ならぬご教示を得たことに対し、ここに合せて謝意を表したい。

なお、発掘現場においては、地元の方々に終始多大な協力を得て、ここに報告することができたことに対してもお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴遺構－P、土坑状遺構－SKと略号している。なお、現場あるいは編集に掲示した図面は、島根県益田土木建築事務所から提供を受けた1/500縮尺のものであり、また位置図などはワールド航測コンサルタント株式会社調製の匹見町全図、縮尺1/25000を使用したものである。

5. 調査地点の所在地については、調査時に鑑みて旧住所で標記した。なお、出土した遺物または該当関係についての資料は益田市埋蔵文化財匹見調査室で保管している。

6. 編集にあたっては、前掲の調査員・調査補助員らの協力を得て、執筆・編集は渡辺・栗田が共に行ったものである。

目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過 -----	(渡 辺) - 1
第1節 発掘調査に至る経緯 -----	1
第2節 発掘調査の経過 -----	1
第2章 地区概観 -----	(渡 辺) - 2
第1節 地形的環境 -----	2
第2節 歴史的環境 -----	2
第3章 調査概要 -----	(栗 田) - 5
第1節 位置と立地 -----	5
第2節 調査概要 -----	6
1. 調査区の設定 -----	6
2. 堆積状況 -----	7
第3節 遺構 -----	8
1. はじめに -----	8
2. 柱穴・土坑の検出状況 -----	9
第4章 出土遺物 -----	(渡 辺) - 14
第1節 遺物の出土状況 -----	14
1. はじめに -----	14
2. 遺物の出土状況 -----	14
第2節 実測遺物 -----	15
1. 実測土器 -----	15
2. 実測石器 -----	18

挿図・図表目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	調査地点とその周辺の遺跡分布図	3
第3図	地形断面図	3
第4図	調査区配置図	5
第5図	地区名図	6
第6図	土層図	7
第7図	遺構全容図	9
第8図	遺構検出状況図（1）	10
第9図	遺構検出状況図（2）	11
第10図	遺物平面分布図	12
第11図	土器実測図（1）	15
第12図	土器実測図（2）	17
第13図	石器実測図	19
第1表	遺構計測表	8
第2表	遺物集計表	14

図版目次

図版 1

調査地点鳥瞰

図版 2

- 1. 上流側からみた調査地点（北西から）
- 2. 調査地点近景（南西から）
- 3. 発掘調査風景
- 4. A調査区の西壁の堆積状況
- 5. D調査区の西壁の堆積状況
- 6. 東西トレーナーの北壁の堆積状況

図版 3

- 1. 押型文土器の出土状況（C調査区）
- 2. 繩文土器の出土状況（D調査区）
- 3. 石礫の出土状況
- 4. 黒耀石の出土状況
- 5. P01～03・SK05土坑の表出状況（A調査区）
- 6. SK06・SK07土坑の表出状況（A・D調査区）

図版 4

- 1. SK11土坑の表出状況（B調査区）
- 2. SK12土坑の表出状況（C調査区）
- 3. SK13土坑の表出状況（D調査区）
- 4. SK15土坑の表出状況（D調査区）
- 5. SK04土坑の半截状況（A調査区）
- 6. SK10土坑の半截状況（B調査区）

図版 5

- 1. SK13土坑の半截状況（D調査区）
- 2. SK15土坑の半截状況（D調査区）
- 3. SK16土坑の半截状況（D調査区）
- 4. 頗著な焼土がみられたSK16土坑の半截部（D調査区）
- 5. SK02～04土坑の完堀状況（A調査区）
- 6. P01～03・SK05土坑の完堀状況（A調査区）

図版 6

- 1. P04・SK06・SK07土坑の完堀状況（A・D調査区）
- 2. SK09・SK10土坑の完堀状況（B調査区）
- 3. SK12土坑の完堀状況（C調査区）
- 4. SK13土坑の完堀状況（D調査区）
- 5. SK16土坑の完堀状況（D調査区）
- 5. 実測風景

図版 7

- 1. A・B調査区の完堀状況（東北東から）
- 2. C・D調査区の完堀状況（東北東から）
- 3. 南西からみた全調査区の完堀状況

図版8

1. 実測土器類（1）

2. 実測土器類（2）

図版9

1. 実測石器類（1）

2. 実測石器類（2）

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

調査対象地である島根県美濃郡匹見町大字道川（現、益田市匹見町道川）イ63-1番地ほかは、平成14年度において島根県益田土木建築事務所から開拓の意図があることを聞きよんでいた。したがって匹見町教育委員会としては、平成15年度に係る対象地の詳細分布調査を実施する手筈を整えていたのであった。

島根県益田土木建築事務所から匹見町教育委員会宛に正規の通知が届けられたのは、平成15年8月26日付けの益土第1371号の文書であった。その内容は、国道191号道川工区新世紀道路（景観対策）事業（後に国道191号道川工区特定交通安全施設等整備事業に変更）計画があるので、遺跡調査に係る協議したい旨のものであった。これを受け、匹見町教育委員会は平成15年11月27日付（匹教第230号）において、同年9月に詳細分布調査を実施したところ、該当地は遺跡であることが判明したこと、文化財保護に協力願いたい主旨のことを事業者側に通知したのであった。その後（同年12月）事業側と協議したもの、事業の変更は無理であるので、記録保存とすることで両者は一致をみたのである。

平成16年4月13日には、島根県教育委員会から当遺跡における保護に対しては遺漏のないようにとの通知を受け、そして匹見町教育委員会は同年6月18日付（匹教第83号）で、島根県教育委員会へ埋蔵文化財発掘調査の報告を提出するなど、本格調査にへと手続きを済ませたのであった。

第2節 発掘調査の経過

事業対象地は、国道191線沿いの約2560m²を測る場所に当り、該当地に簡易のポケットバックを設置するというものであった。詳細分布調査（平成15年度）において、対象地の南西端約300m²範囲が遺跡であることが想定されていたので、調査は該当地点を中心に実施することにし、その字名が藏屋敷田（くらやしきだ）といっていることから、これを遺跡名としたものである。

現地調査は、平成16年6月22日から始めたが、暗灰～暗褐色土の4層から轟・曾畠式などの土器片とともに石器剥片が、そして褐色～暗褐色粘質土の6層からは縄文早期の押型文が出土するなど、一定の成果が得られたのである。ただ土器や石器などの遺物が生活誌を解明するほどの多量なものだったとはいはず、また遺構においても上位層は後世において深い削平が行われたらしく、そして下位層においては砂質・砂礫層といった状況で、とくに遺構においては不鮮明で把握が困難であったというのが実状であったのである。

夏季という暑い中で行われた現地調査も、同年8月20日には無事終了することができたのである。そしてそのことを事業者側の島根県益田土木建築事務所に報告し、以降は遺物の整理、本年度末の発刊予定の他の遺跡報告書の作成なども合せ、忙殺の日びであった。

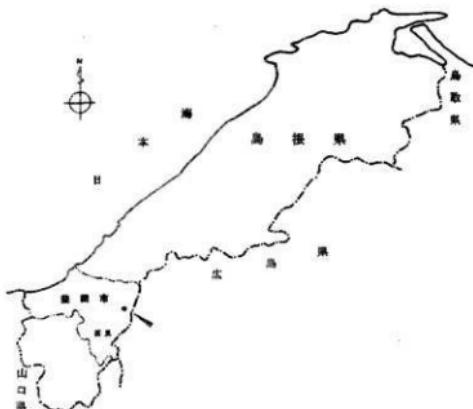
（渡 辺）

第2章 地区概観

第1節 地形的環境

益田市匹見町の道川地区は、南東側を1000m内外の中国山地（脊梁）山地が北東—南西方向に走り、境山の形成して広島県と接するといった山間地に位置する（第1図）。また中国山地に沿う二本の断層谷（匹見層群）も顕著で、本地区を貫流する匹見川はその中国山地に発して断層谷に沿いながら流下しているが、2本の断層谷が相会した場所を出合原と呼ばれ、そこが本報告する藏屋敷田遺跡の所在地である。そして匹見川は、本地で赤谷川を合せて峡谷（表匹見峡）をつくりながら南西流し、匹見の中央部で北西流して日本海へ流れ込んでいるのである。

本地区域が2川の合流地といっても支流の赤谷川は、上流域では地溝帯を挟んで本流と併流するものの、該地において断層地塊を横切って相会する、といった



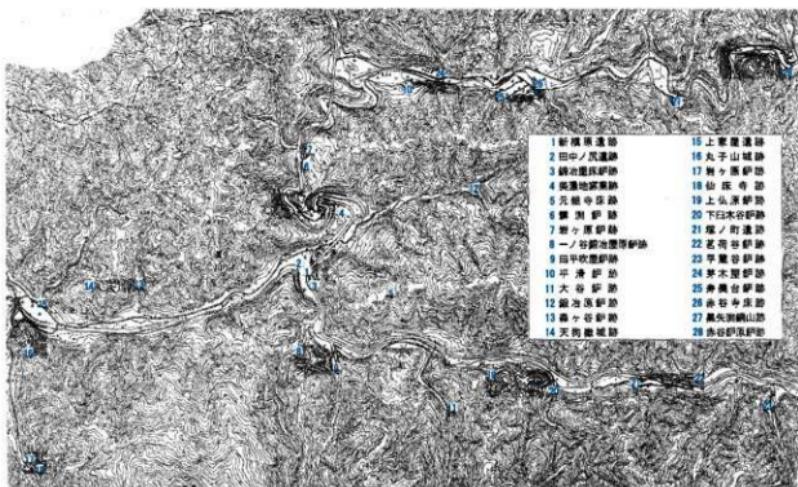
第1図 遺跡位置図

地形形成のため急峻な山がせまって沖積地の発達をみない。また流域の四周には流紋岩質凝灰岩類から成る天杉山（1,173m）・中ノ川山（1,136m）・空山（1,060m）・岩倉山（1,022m）といった高位な山地が屹立し、僅少の谷平地を形成した本域（標高470m～476m）との比高差も大きく、したがって山野を覆う林相も豊富である。例えば、流域を中心に、カシやツバキ・サカキといった照葉樹林がみられる一方で、標高800m以上の山岳地においてはブナ・クロモジを主体とした冷温帶林が植生しているのである。

しかし、本地区で代表的な樹林帯といえば、トチ・ホウ・ケヤキ・クリなどの、とくにミズナラ・コナラといったナラ林の落葉広葉樹で占められており、その実・果実・根菜を求めてかけめぐる小中動物も多く生息する。例えばイタチ・タヌキ・キツネ・イノシシ・サル・アナグナ（ムジナ）・ツキノワグマといったものがそうで、そして渓流には遡河性のサケ・マスの仲間であるゴギ・ヤマメが棲み、昭和初めごろまではマス・ツガニも比較的生息していたといわれ、山地の産物誌の豊かな地区である。

第2節 歴史的環境

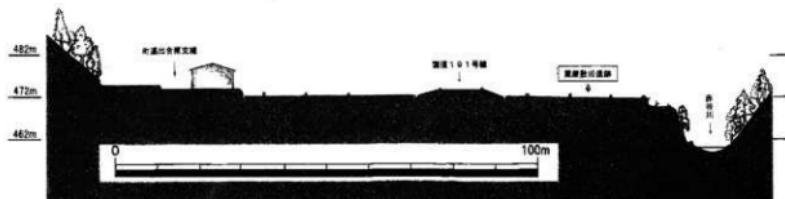
圃場整備事業による開発が進められた本地区の、とくに下道川や出合原では事前発掘調査によっ



第2図 調査地点とその周辺の遺跡分布図

て、原始遺跡の存在が明らかになってきている。例えば、下道川では縄文後期前半の配石や住居址が検出された前田中遺跡があり、また縄文早期末から前期前半のダヤ前遺跡、そして縄文後期の上家屋（うえなや）遺跡といったように分布しているのである。これらはいずれも四見川が形成した狭長の河岸段丘に立地しているものであり、狩猟採集を基調とした縄文人たちが豊富な資源をもつ落葉広葉樹帯を求めて往来し、その住居地は狭長な河岸段丘、あるいは合流地などの狭小な谷平地であったことを物語っているといってよかろう。

また本報告する調査地点の所在する出合原にも縄文遺跡は少なくなく、調査地点の300m南西側には縄文早期から前期前半に至る田中ノ戸遺跡があり、同遺跡からは集石遺構も発見されているのである。また、南側200mを測る2川の合流地点には、旧石器から縄文中期にかけての新楨原遺跡がみられるなど、旧石器は勿論であるが、その縄文のものといっても今回のものも含めているならば、それらが古い時期に位置付けられるものが分布しているという特徴性がみられる。そして下道川のような狭長な河岸段丘とはいえ、比較的縄文遺跡が分布しているということは、縄文人たちにとって格好の環境下にあったということはいうまでもないであろうが、加えて本地点域が三交差点



第3図 地形断面図

に当たっているという地形的立地によることも、その理由であったかも知れない。つまり北東—南西方向の脊梁山地に沿う谷筋、そしてこれを相集して地溝帯を突破して北流して日本海側に至るといった、その分岐点が文化の通路としての役目を果してきたからではないかと思われる（第2図・図版1）。こうした地の利は、現在でも小学校・郵便局・診療所・保育所などの公的機関が集中している様子が窺われ、近世期においては鉛（たたら）で繁をなした藤井氏、あるいは美濃地氏などの庄屋も居を構えていたことからも頷けられる。

さて、本地区では繩文遺跡は顕著であるものの、弥生・古墳期の遺跡は今のところ皆無である。中世期のものとしては、三隅氏の支配が及んでいた（後には益田氏）山城の道川城跡・天狗嶽城、そして該当期のものと想定される宝鏡印塔の1基みられるにすぎず、低調である。また近世期においては、浜田藩下の道川村として石高228石（元和5年）、後には道川下・上村の2村に分村され、山林の豊かさから特に鉛業は盛んであった。その鉛跡は、本地区においては32箇所が確認されており、銅山も4箇所を数えるなど、鉄・銅の生産遺跡が目につくといった特徴がみられる地区でもある。そして一方では、この山野を活かして楮や三桻が栽培されて紙業も盛んで、『石見匹見町史』（矢富熊一郎著）によると、安政2（1855）年のものとして道川両村合せて50丸（半紙20枚=1帖10帖=1束、60束=1丸）が請紙され、その製紙は137戸に及んでいたと記されているである。

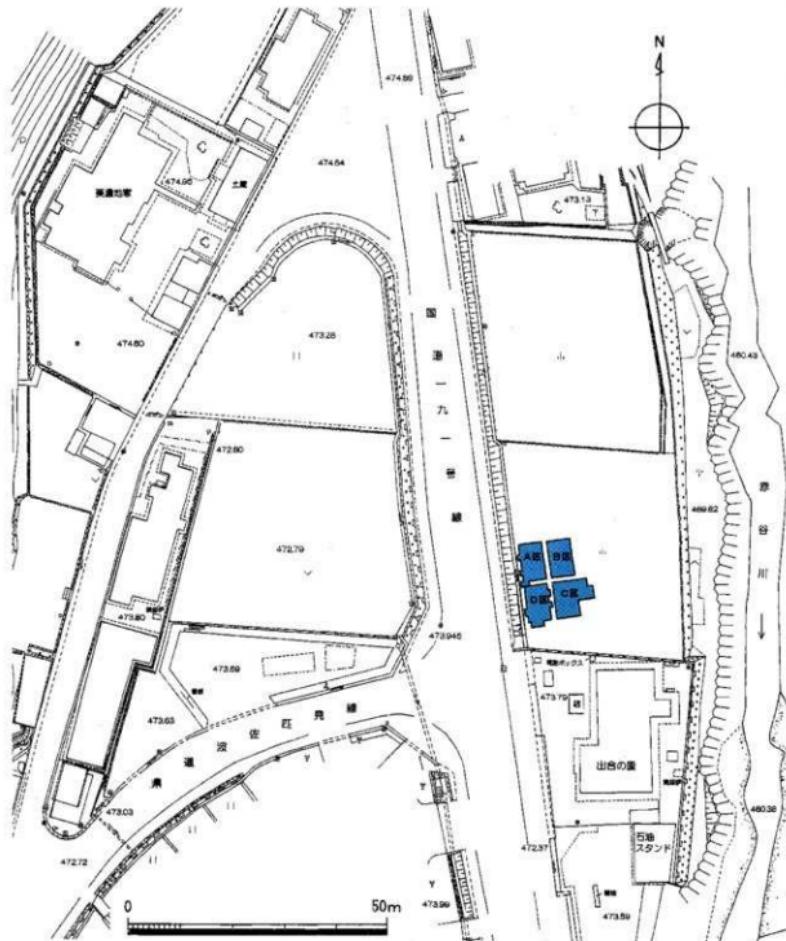
その後、現代に至っては下・上村の両村として引継がれていたが、明治22年には合併して道川村となり、当時は製炭や木材産出などといった山地ふり向けられた生業が盛んであったのである。そして昭和30年には匹見上・匹見下村と合併（翌年に町制施行）し、当時の道川には197戸、人口1,091人を数えたが、昭和30年代後半には次第に1次産業の衰退から過疎化が進み、今では（平成17年1月）戸数76、人口202人となり、主に土木事業などに就業しながら農・林業を兼ね活計しているというのが現況である。

（渡辺）

第3章 調査概要

第1節 位置と立地

本遺跡は、島根県美濃郡四見町（現益田市）四見町道川イ63-1番地ほかに所在し、その地点の蔵屋敷田（くらやしきだ）と呼称される地名をもって遺跡名とすることにした（第1図・2図）



第4図 調査区配置図

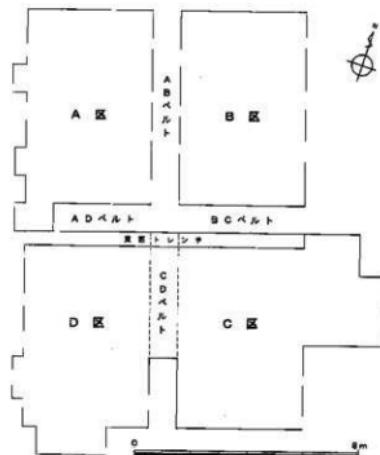
その遺跡が所在する道川の出合原地区は、北西流した匹見川本流と南東流した支流赤谷川が相会した地点域にあって、そこは2川の合流地ということもあってか、狭ながら谷平地が形成され、とくに支流赤谷川の右岸は河岸段丘が発達している。遺跡は、その河口の北側に当たり、現地標高472m、赤谷川と比交差約23mを測る畠地に立地している。こうした3方に開口した地形的立地は、要衝として本地区的中心的役割を果たしているとみえ、近隣には公民館・郵便局・小学校などの公共機関があるとともに、商店や民家も点在しているといった景観にある（第3図・図版2-1）。

第2節 調査概要

1. 調査区の設定

平成15年行った分布調査では、北一南方向へ約80m、東一西方向へ約32m測った長方形を呈した畠地（2560m²）に、2m×3mの調査区を7箇所、また3m×3mのものを2箇所ほど設けて調査を行った。その試掘では国道寄りの南西端面に設定したI区から5点の繩文土器片が出土し、また本格調査の事前踏査では、その隣接するC区周辺においても土器・石器・黒羅石片などの露見の遺物が採集されたのである。したがって、その域の表探遺物の分布状況、または地形的立地などを踏まえた上で、両区をとり込む形で調査区を設定することにしたのである。

調査区の設定にあっては、基準となる起点杭を定めることから始めることにした。その起点は、対象地内の西端面を斜行する側溝の下流側の端部から上流側へ約5m測り、さら



第5図 地区名図

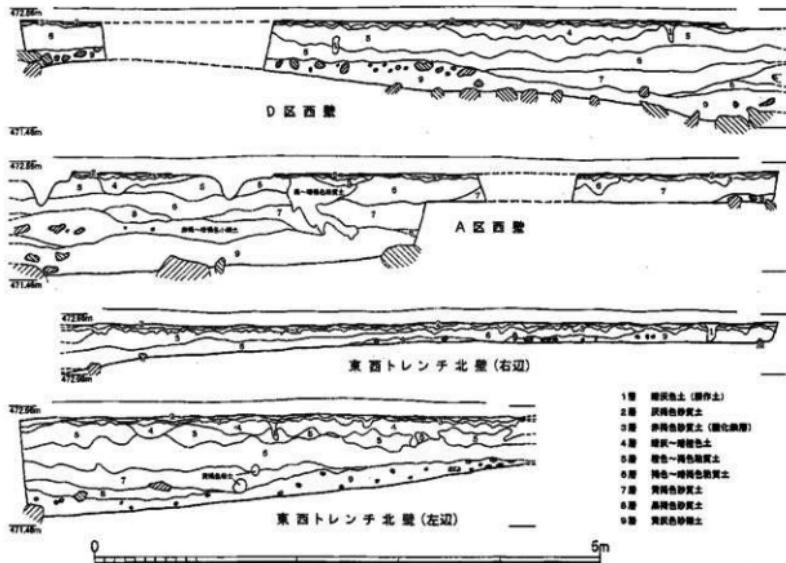
に川寄りの東側に向かって1m測って、そこに任意に定めたのであった。そして、その起点から側溝沿いに上流側方向に1.5m測って杭を打って、これを北西杭とした。さらに北西杭から東側に向かって10mを測り北東杭を設けた。これより以降は、これに対照的な実測を行って、南東杭を設けて長方形区画としたのである。したがって1.5m×1.0mということになり、調査面積は、150m²になったのである（第4図・図版2-2～3）。そしてその調査区には4分割するように、幅1mのセクションベルト十文字に入れて区画した。これら4区画したものは、アルファベットの大文字を用いて、北西側のものをA区とし、そして右回りの方向順にB・C・D区と呼称することにして掘削を開始することにした。そして掘削の中盤にA（西壁）・D区（西・東壁）の壁沿いに遺構が伴出したため、それらの周辺を部分的に拡張することとした。またC区では、6層から数点の土器片が出土し、それらは東寄りに偏在して出土したため、その東辺も8.5mほど拡張し、最終的には

総面積は164.9m²となったのである（第5図）。

2. 堆積状況

調査対象地点域は開発予定地であるため、既に1層の耕作土は事業者によって削除され、調査対象外とした北側は埋め立てられていた状況下で始めたのであった。

本調査地における基本的層序は、上位から削除された1層の暗灰色～暗橙色土（耕作土）、2層の灰褐色砂質土（客土）、3層の赤褐色土（酸化鉄層）、4層の暗灰～暗橙色土、5層の橙色土～褐色粘質土、6層の褐色～暗褐色粘質土、7層の黄褐色砂質土、8層の黒褐色砂質土、9層の黄灰褐色砂礫土の順に堆積していた（第6図・図版2-4～2-6）。しかし、この層序についてはB・C区では明確にとらえることができなかったが、次第に低位に向かってゆく国道寄りのA（南半）・D区（北半）の堆積状況から原層序が把握できたものであった。つまり、それ以外のところでは、6層上位部以上が高い深度で削平されたことが窺われたのであったのである。



第6図 土層図

2層は、やや砂質性の灰褐色をした客土である。層厚は1層の削除時の影響をうけたとみえ、2～4cmを測って薄く、断続的な部分が多くみられた。なお本層からは搬入されたと想定される5点の陶磁器片が出土した。そして3層の赤褐色土は、2～6cm厚薄差が著しく、波状的に酸化鉄が含浸していたのであった。

粘質性のある暗灰～暗橙色土の4層は、尖滅部分から厚いところで26cmを測って、西辺中央に向かってやや厚く堆積し、そこを中心として北西～南西に向かって希薄となり欠陥していた。本層は全体的に削平の影響うけており、とくに北西～南西面に至っては頻度の高い削平が行われたもの

考えられる。したがって、本来は現地形に沿ってある程度の堆積高があったものと想像されるのである。つぎの5層は、橙色～褐色粘質土。層厚は、厚い部分で30cmを測るが、尖滅したところもあって、厚薄差がみられた。そして下位の6層とは色調は異なるものの、土質的には類似しているので実質的には6層とした層位も含んでいたものと考えられる。なお遺物・遺構については、16点の縄文土器と石器類の15点が出土しており、下位の6層上面にはこれらと共に伴すると想定される遺構も検出されている（図版3-2-~4）。その下位の6層は、褐色～暗褐色粘質土であった。本層も北西～南面にかけては削平で尖滅して消失しているものの、西辺の中央部に向かって下降する基盤層に沿って堆積（約36cm）していた。なお、C区の本層からは縄文早期のものと想定される押型文土器片22点が出土しているものの、それらに伴う遺構は認められなかつたのであった（図版3-1）。

黄褐色土の7層は、よく締った河砂であった。上流寄りの北側が約30cmを測って厚く、そして河寄りの東側、また下流寄りの南側に向かっては尖滅している。その層序には僅かに山土系の粘土が含まれており、おそらく赤谷川のオーバーフロウによって山土の崩落土の堆積と思われる。そのつぎの有機質である8層は、黒褐色砂質土である。層厚は8～12cmを測って薄く、A・D区の西半面に部分的に認められるだけで、他区では見当たらなかったのである。これは地形的、または層序状況からみて、本層は赤谷川の数次の氾濫によって流失したものと考えられる。これらの7・8層からは、遺物・遺構は確認されていない。

10～50cm大の円礫を含む黄灰色土の9層は、河床と想定される砂礫層で、下位へ40cmほど掘削したところで、文化層は捉え難いと判断し、掘削調査を終えたのである（図版7）。

第3節 遺構

1. はじめに

今回の調査で認められた遺構は、各種合せて22基のものであった。また、これら検出した遺構に

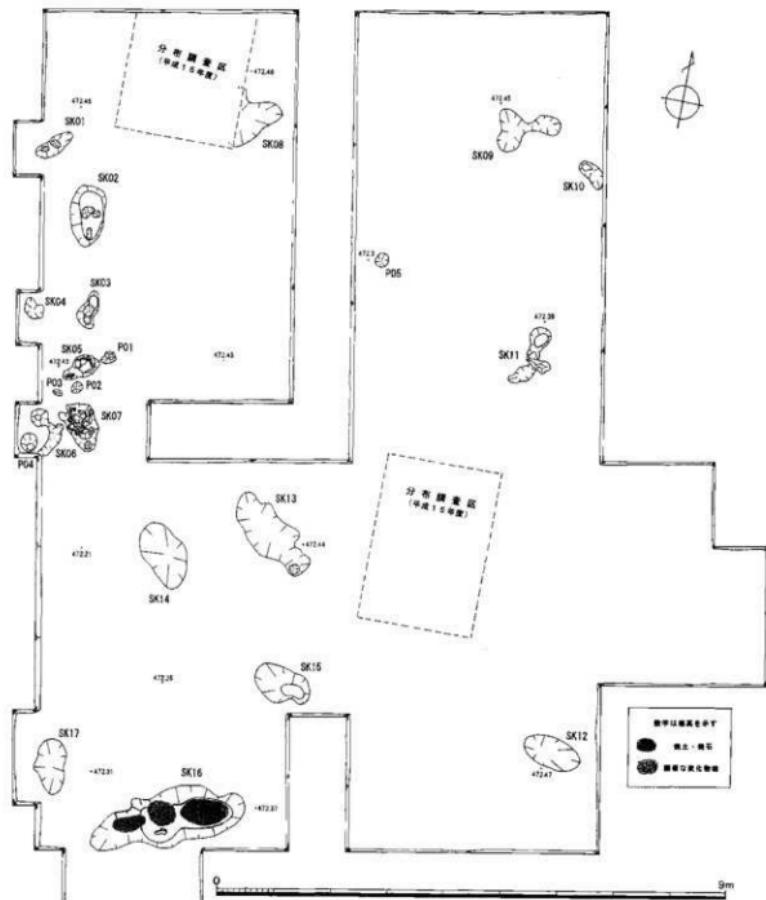
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	検出面標高(cm)	備考
SK01	71.0	25.0	25.5	472.405	炭化物
SK02	108.0	58.0	41.0	472.440	焼土・炭化物
SK03	67.0	39.0	55.5	472.435	
SK04	41.0	13.0	17.0	472.450	
SK05	70.0	47.0	21.5	472.450	
SK06	102.0	-	25.0	472.460	坑上に1石の焼石
SK07	103.0	58.0	55.0	472.460	石器剥片1点・炭化物
SK08	-	-	20.0	472.410	
SK09	115.0	-	18.0	472.470	
SK10	56.0	28.0	23.5	472.535	
SK11	123.0	32.0	19.0	472.400	
SK12	104.0	51.0	26.0	472.450	
SK13	172.0	73.0	30.0	472.470	炭化物
SK14	126.0	69.0	13.0	472.240	
SK15	108.0	62.0	23.0	472.450	縄文土器1点・炭化物・焼土
SK16	284.0	96.0	37.0	472.320	石器剥片1点・縄文土器2点・炭化物・焼土
SK17	99.0	48.0	9.0	472.190	
P01	27.0	16.0	29.5	472.450	
P02	20.0	18.0	23.0	472.460	
P03	17.0	11.0	39.0	472.450	
P04	30.0	29.0	19.0	472.450	
P05	18.0	17.0	16.0	472.300	

第1表 遺構計測表

いっては、凡そ30cm以下の柱穴状のものをP（ピット）とし、それ以上のものをSK（土坑）と略号することにした（第7図・図版3～6）。

これらの殆どは5層の橙色～褐色粘質土と6層の橙色～暗褐色粘質土との層界に確認されておりとくに縄文早期末～前期初めの遺物が比較的多く認められた調査区の南西半部に顕著に表出していったのである（第10図）。それらの遺構の大半には、文化層として捉えた5層の橙色～褐色土の土質系のものが陥入していることから、構築面は5層内に存在していたと考えられる。しかし、基盤層が上昇する北西～南西面に至っては、頻度の高い削平などがあって、明らかにできないものもあったと想像している。以下、これらのことと踏まえた上で、検出状況をみていくことにする。

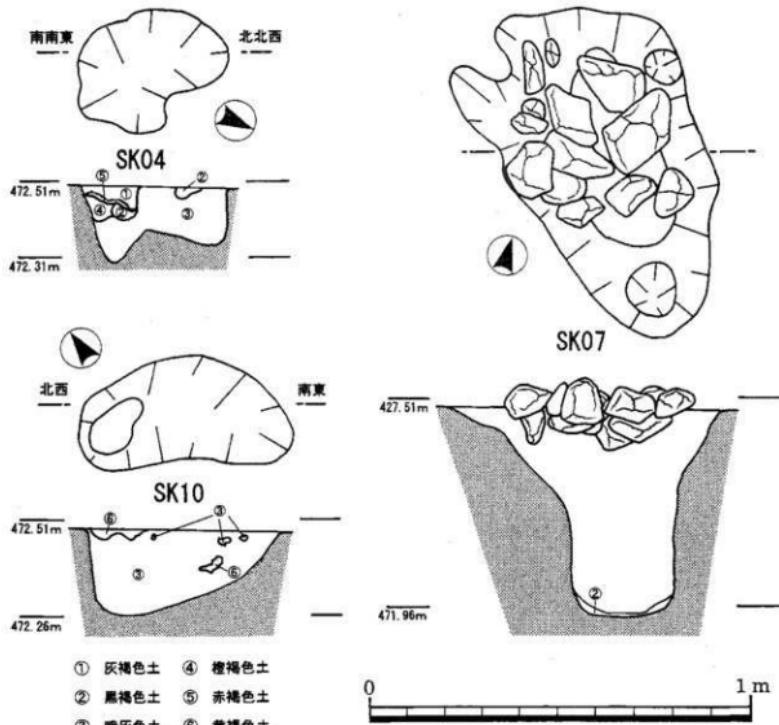
2. 柱穴・土坑の検出状況



第7図 遺構全容図

ピット Pと略号する柱穴状のものは、5穴検出された（第7図・第1表）。これらのピットは、径約17~30cmを測り、深さ約16~29cmを測るもので、いずれも円形を呈するものであった。これらの検出面は5層の橙色~褐色粘質土と、6層の褐色~暗褐色粘質土の層界面に検出されたもので、遺構内には暗灰色土系の土質のものを嵌入していたものの、共伴遺物などは認められなかったのである。またこれらのピットは、土坑が集中するA調査区の南西端面に散見されたが、しかし柱穴（P01~04）などから想定を試みたが、その具体的な形態を把握することはできなかつたのである。

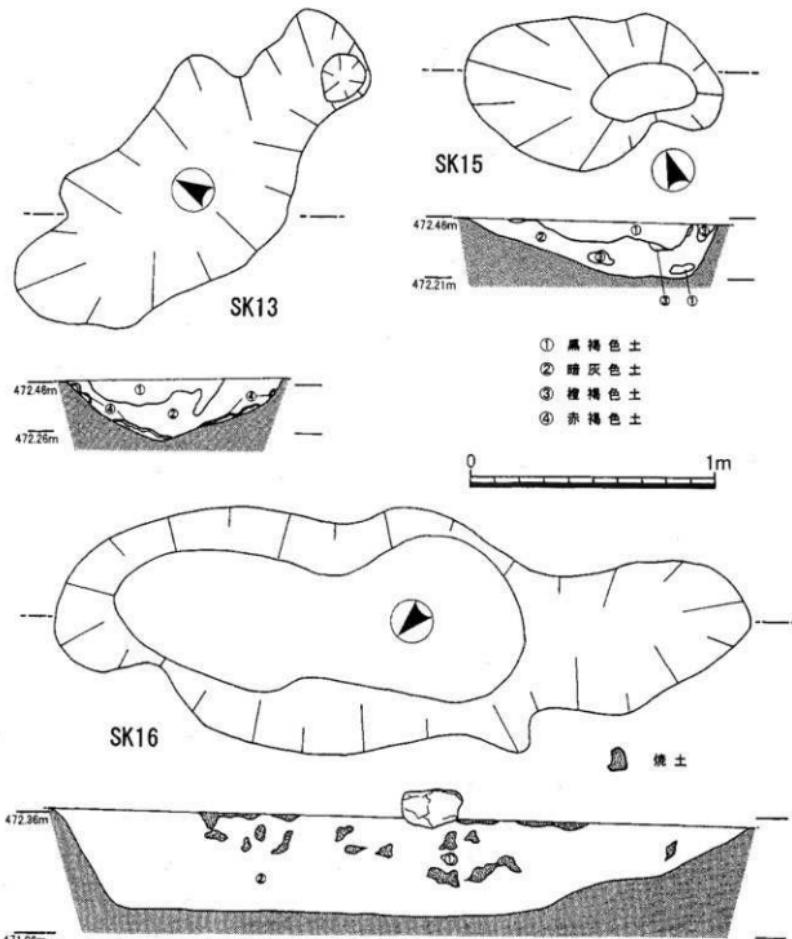
土坑 SKと略号する土坑状のものは、17基が検出された（第7図・第1表）。これらの土坑もピットと略号した柱穴と同様で、5層と6層との層界面で確認され、これらには5層の暗灰色土系の粘質土が陥入していたのである。このうちA区の西端面で検出されたSK01~05土坑は、最大径40~100cm前後、深さ17~55cmを測り、楕円形・不整形を呈するものであった（第8図・図版3-2・4-5・5-5~6）。そして坑内には粘質土の暗灰色土系のものが陥入し、部分的に酸化鉄分の含浸がみられるなど、またSK04などの一部には小獸などの住穴の痕跡と思われ、坑底には上位からの灰褐色土が嵌入していたのである。なお、SK01・SK02には少量の炭化物が認められ、またSK05の坑中に



第8図 遺構検出状況図（1）

は径約15cmを測る焼石の1石検出されているという状況であった。

A Dベルトの西半面に検出されたSK07は、長径103cm、短径93cm、卵形を呈して深さ55cmと比較的深い、坑壁は斜度をもち、坑内には暗灰色粘質土が陥入する（第8図・図版3-6・6-1）。そして坑上には、意図的と想定される径5~25cm大ほどの河原石を13石伴い、またそれが坑のほぼ中西部で重なるように集石していたのである。こうように介在する河原石は、他の土坑にはみられないことから、本坑に伴う意図的なものと想定されるが、それがどういった性格のものなのかについては判らなかったのである。なお本坑の西面に検出されたSK06には、1点の石器剝片と炭化物が

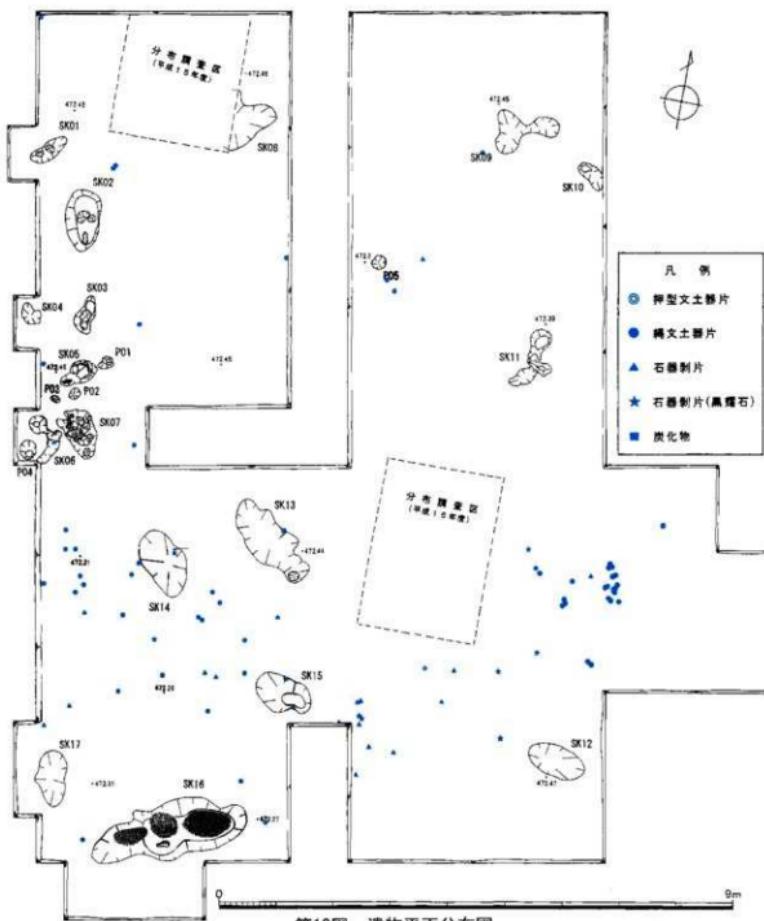


第9図 遺構検出状況図（2）

認められたのであったのであった（第2表）。

B区の東端面で検出されたSK10は、楕円形を呈した土坑である（第8図・図版4-6・6-2）。長径56cm、短径28cm、深さ23.5cmを測って浅く、坑壁は緩斜したものであった。その坑内を覆う埋土は暗灰色土系のもので、ブロック状に下位部の砂質性の黄褐色土が嵌入していた。本坑に5層の橙色～褐色粘質土から下位部に至るといった陥入状況から、これらは縄文期の遺構であろうと考えられるが、しかしどういった形態のものかについては判然としなかったのである。

SK13土坑は、C調査区の北東端面で検出された不整形を呈す土坑で、長径172cm、短径73cm、また深さ30cm測るものである（第9図・図版4-3・5-1・6-4）。坑内の大半が暗灰色土系のものが



第10図 遺物平面分布図

陥入していたが、坑の中央上位部には炭化物を含む黒褐色土が嵌入し、緩やかな坑壁沿いに酸化鉄分が含浸するといった状況であったのである。そしてその南面のSK15は、長径108cm、短径62cm、深さ23cmを測る楕円形を呈した土坑である（第9図・図版4-4・5-2）。坑内を覆う埋土は、暗灰色土系のものを中心としたものであるが、坑の上位部には炭化物による黒褐色土がみられ、部分的に嵌入する橙褐色土の焼土と思われるものもみられたのであった。また本坑からは、1点の縄文土器片が検出されたのである。このような状況から、両坑とも炉であった可能性が考えられるが、量的から考えて断定できないものの、人為による火を扱った場所だったことはいえそうである。

D区の南端面に検出されたSK17は、本調査区で最も大きな長楕円形を呈した土坑である（第9図・図版5-3～4・6-5）。そして坑内には粘質性の暗灰色土が陥入し、そこには焼土と思われる橙褐色土がブロック状に嵌入していたのである。また坑の中央部の上位部から多量の炭化物などが検出されている状況から、炉であった可能性が強い。しかし削平などの影響があって、原形のものであるかは明確にできなかった。なお本坑からは1点の石器剥片・縄文土器片2点が共伴したことから、本坑は縄文前期初めのものであったことが判ったのであった。ただし、これらの中に押型文土器に伴う時期の遺構がないことは、検出状況からみてもはつきりいっていいことだけは確かである。

（栗田）

第4章 出土遺物

第1節 遺物の出土状況

1. はじめに

今回の発掘調査対象地においては、事業者側によって事前に水田耕作土の1層は取り除かれていた状態であったが、その時点において一部では既に縄文遺物が露見するという状況下で始めたのであった。したがって、それらは第2表に2層表面採集として取り扱い、また新たに2層を掘削して出土したものとはいえ、詳細実測は行わず採集のみにとどめた。ただし、その下位の3層以下からは、平面あるいは垂直分布などの原位置方式で總て実測したものである。

これらを層ごとに集計したものは第2表のとおりであるが、炭化物や焼土については顕著なもの以外は採集していない。また主に2層で採り上げた陶磁器などについては、特別に採り上げて紹介するものが見当たらなかったので、これも除くことにした。

2. 遺物の出土状況

出土した遺物を大別すると、縄文遺物と、陶磁器類を中心とした近世遺物とに分類できるとともに、層序においては前者は5・6層で、また後者のものは2層あるいは1層に包含していたものであった。これを前者の縄文遺物に限ってみていくと、縄文土器が56点、黒曜石を含めた石器の剥片が32点とつづき、そして楔形石器の2点、石礫と石錐が1点ずつと、石器の利器といえるものは僅かであった。

また、5・6層に出土した縄文土器を詳細にみていくと、押型文のものは6層で、轟式や表裏条痕

		楔形石器	石器剥片	黒曜石剥片	石錐	石錐	縄文土器	陶磁器	錢貨	炭化物	焼土	計
2層表面採集		1	1		1	5	12	1				21
A区	5層			1		1				1	2	
	6層					4						4
B区	2層						2		1			2
	5層				1	1						2
	6層					3						3
C区	廃土	1										1
	2層						2					2
	5層	3										3
	6層	8	6			12						26
D区	2層						1					1
	5層	1	3	6		14						24
	6層					12						12
ADベルト	6層	1					1					2
	SK01								少量			-
	SK02									少量		-
	SK06									少量		1
	SK15		1				1					1
	SK16						2			少量	少量	3
	計	2	18	14	1	1	56	17	1	-	-	110

第2表 遺物集計表

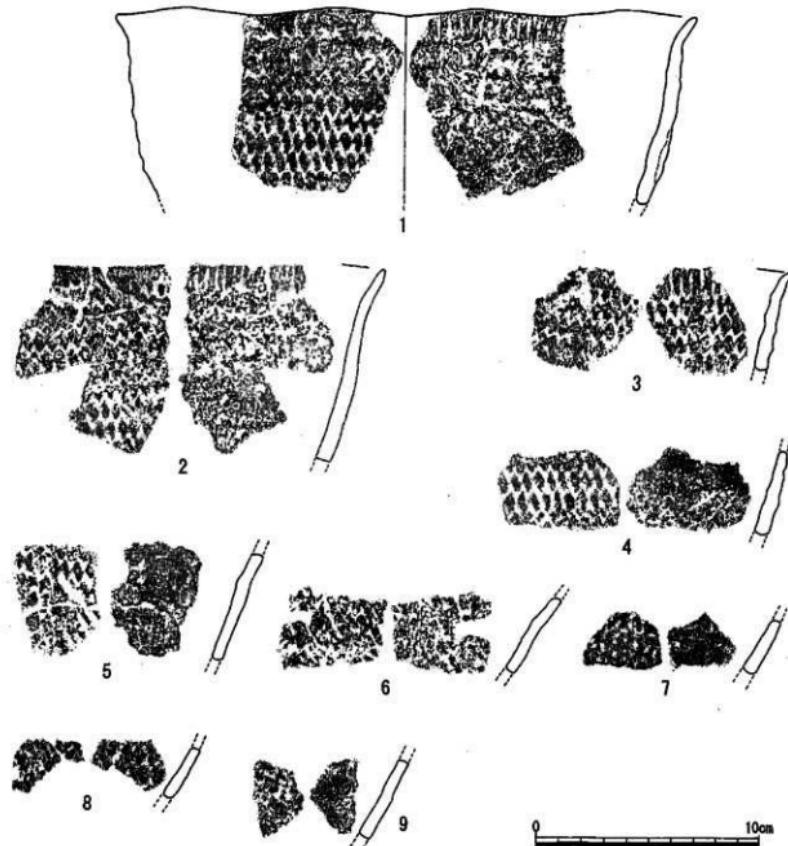
文系などの、その他のものは5層で捉えられたものであったのである。それも前者の押型文土器は、C区の東端という極めて局限的な地点に集中して出土したという事実と、それに黒耀石の剥片も凡そC区で捉えられたという傾向が窺われたのであった。（第10図）。なお、後者の押型文以外の土器は、調査区内の5層に点在して出土したもの、遺構とともに南西半に濃密的に分布していたのである。

こうしたことを前提にした上で、以下縄文遺物に限って、詳細についてみていくことにしたい。

第2節 実測遺物

1. 実測土器（第11図・第12図・図版8）

1から9は、いずれもC区の6層褐～暗褐色粘質土に出土した押型文土器。このうち1は、口径



第11図 土器実測図（1）

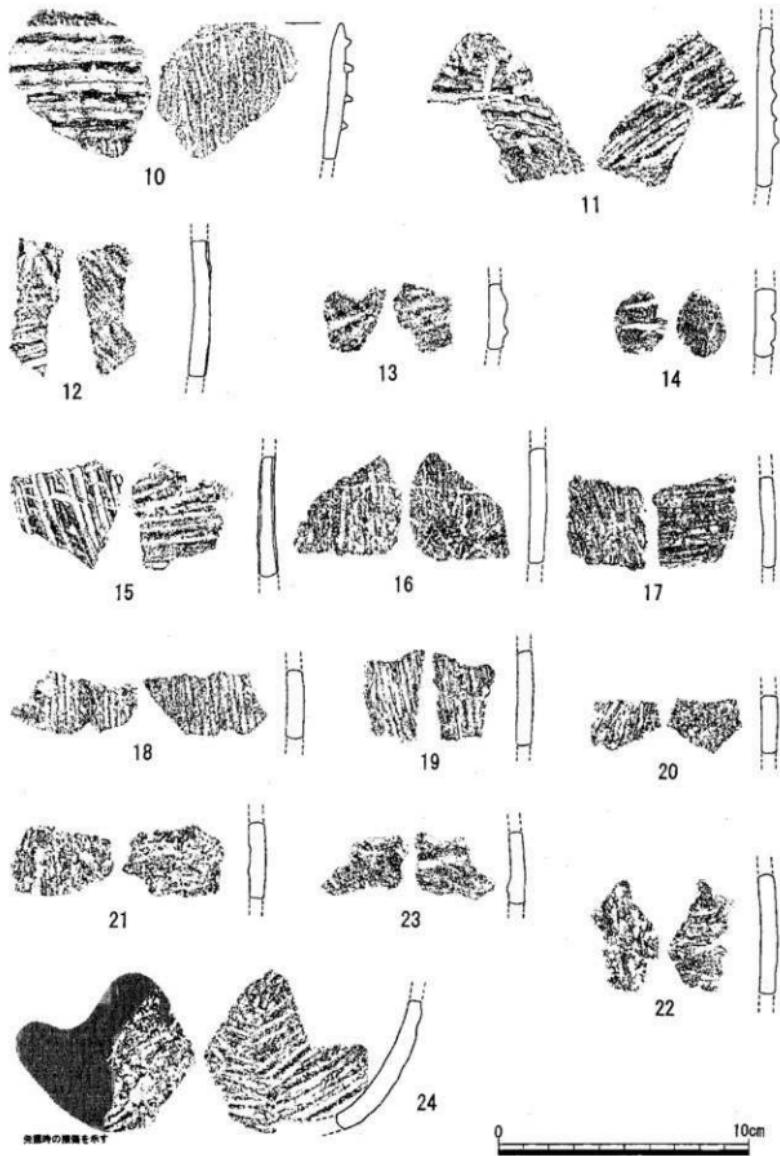
約26cmを測る波状の上半部で、口端部は薄くなって緩く外反するもの。頸部は僅かにすぼみ、胴下半部にかけては急激にすぼむといった、砲弾形を呈するものと思われるもので、下半部の厚い部分で8mmを測る。外面には口端部以外、横位の楕円の施文が付けられ、器面は凹凸する。楕円は縦長のもので、径約6mmの円棒をもって3単位で施文する。また内面の口端部には、縦方向の平行沈線が横位に施文され、その間隔や沈線の深さの不等性からみて、押型で施されたものではない。内外面とも煤が付着し、とくに内面は激しいが、口縁部から頸部上半までは軽い押型文を施文しているようにも思えるが、不明確。そしてその下部はナデ調整。胎土は緻密で、暗褐色を呈し、焼成は良好である。

2は1と同様、口縁部から胴上半部までの上半部で、頸部から口縁部のかけて緩やかに外反するといったもの。1と体部の傾きなどは余り変わらないが、口縁部においてはより緩やかで、肩部に僅かな変化が見られる一方、器肉において厚い部分で5mmを測って薄いという違いがみられる。器面が腐朽しているため、施文単位は明確ではないが、縦長の楕円形のものである。内面の口縁部には縦方向の平等沈線を不正行に横位に施文し、その下方から頸部にかけては強い煤の付着ではっきりしないが、胴部はナデ調整である。内外面とも煤が付着して暗褐色を呈するが、接合した1片には酸化鉄は含浸して茶褐色である。3は口縁部で、緩やかに外反し、そして細く尖ったような端部を呈する。器面には約1.5mm幅に3単位の縦長の楕円文を内外面に施文する。ただ前述の1のように、刻みに立体性がみられず、平坦的。内面の端部には縦平行沈線を横位に施文し、器面には酸化鉄が含浸して部分的に橙茶色を呈する。また胎土には石英や雲母がみられる一方、剥落が激しく、けして良好な焼成のものとはいえるものではない。

4は、頸胴部位のものと思われるもので、外面には約1.5mm幅内に3単位の縦長の楕円文を施文したもの。施文は1のように立体的で、また内面は煤・酸化鉄が付着するものの、丁寧なナデが施されていることが看取される。器肉の厚い部分で6mm、薄い部分で4mmを測り、胎土に雲母がみられ、外面は暗褐色、内面は黒色を呈し、焼成は極めて良好なものといえるものである。5は、頸胴部位のものと思われるもので、外面には浅い押型文がみられるが、内面には丁寧なナデが施されているとともに、本片が頸部であることを思わせる僅かな屈折の変化がみられる。厚い部分で5mmを測り、内外面の色調は灰色、胎土には2mm大の石英を比較的含み、焼成は良好といえるもの。6は、外面に押型が施文されているものであるが、不鮮明。また内面はナデ調整らしくみえるものの、強い酸化鉄の付着で断定できない。

7は、厚さ7mmを測る小片で、外面の施文の凸凹差が弱く、その頂部は円みおび、そして内面はナデ調整。外面は橙色、内面は黒色を呈し、胎土には石英を含み、焼成は良好なものといえるもの。8は腐朽のためか、外面の押型文が顕著ではない。内面はナデで、内外面の色調は橙色、焼成の胎土色は黒色を呈し、厚さ5mmを測る。9は施文、調整、色調など、ほとんど前述の7と同じ。なお、これらの前述した押型文土器は、施文や形態などからみて、黄島式に比定できるものと考える。

10から24は、押型文土器を除く、その他の繩文土器で、ほとんどは5層の橙色～褐色粘質土中に出土し、また平面的分布においては、調査区全体に散布していたものの、とくに南西半のD区



第12図 土器実測図(1)

に集中して出土したものであった。(第10図)。

このうち10から13のものは、口縁部外面にミミズばれ状の隆起文が施文されたもので、うち10は平口縁で、屈曲をもたない単純形といわれているもの。外面にはハイガイによる斜行の条痕文で調整したのち、口縁部帯に4本の隆起を横走状に貼付け、その隆起との間をヘラ状具で横方向にナデ調整を施す。また内面は主に縱方向の条痕調整で、色調は内外面とも暗褐色を呈し、焼成は良好である。11は口縁部で、隆起帯には折曲、円弧文らしき施文がみられるが、その隆起はナデ上げの手法で極めて細い。そして隆起帯以外の内外面はハイガイによる外面を斜向、内面は横方向に調整している。外面には煤が付着して黒褐色、内面は橙色を呈し、胎土には雲母を含み、焼成は良好といえるもの。12は、おそらく前者の11と同一個体のものであろう。13も曲線ふうの隆起文であるが、腐朽のためか、隆起が弱く頂部は円みおびる。

14は、外面に短沈線を施文したものと思われる小片。内外ともナデ調整し、色調は暗褐色を呈する。小片で明かではないが、曾畠式土器系のものではないかと思われる。15は、内外面とも条痕文で調整したものであるが、とくに外面には幅広の条痕で施文したもの。外面は灰色、内面は酸化鉄が含浸して茶褐色を呈し、焼成は極めて堅緻といえるもの。16から19は、いずれも内外面に条痕で調整したもので、器肉は5mm前後を測る。このうち16・17は暗褐色、18は橙褐色、19は暗褐色を呈し、いずれも焼成は堅緻である。おそらく早期末から前期初めに位置付けられるものであろう。

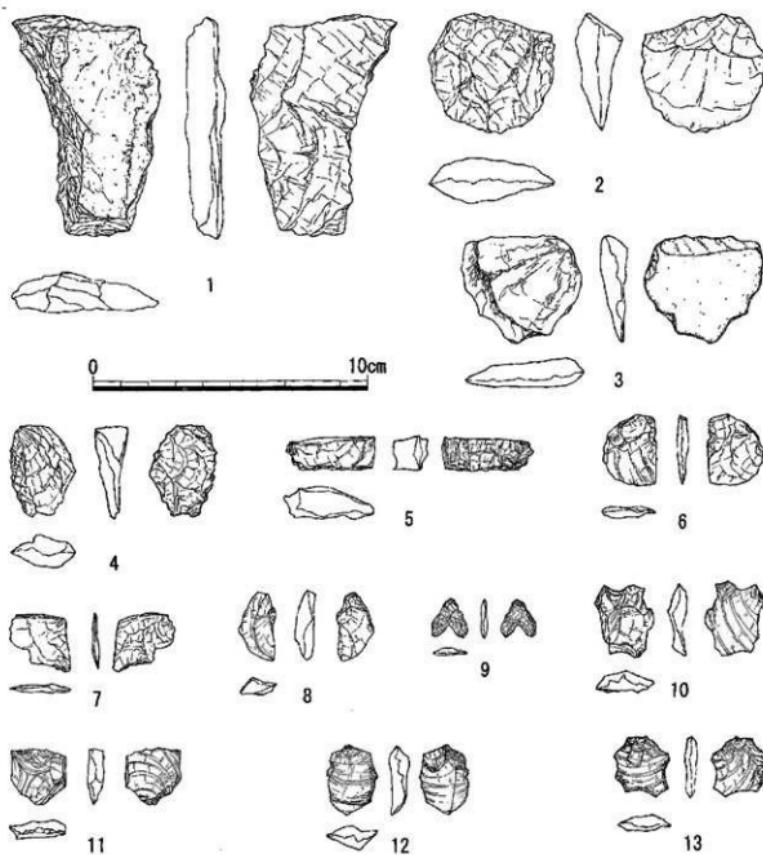
20から23も、凡そ条痕土器系といえるものであるが、うち20・21は外面のみで、内面はナデで、ただし21の内面はケズリ的で堅い。23は、内外面とも条痕調整の後、堅いナデを施こし、色調は橙褐色を呈し、焼成は良好であるとはいえるものではない。

24は丸形の底部と思われるもので、外面には掘削中による損傷によって全体的には捉えられないが、ハイガイによる条痕調整であることが部分的に窺われる。また内面には斜方向などの、しゃくり上げ的に調整していることが読みとられ、屈曲、または調整の仕方などから、本片が底部であることが看取できる。器肉の厚い部分で約8mmを測り、色調は明橙色を呈し、胎土に2mm大の石英や砂粒を含んでいる。調整や形態からみて、轟式系の底部であろうと思われる。

2. 実測石器(第13図・図版9)

1から3は、大振りな石器剥片で、うち1は實岩質なもので、長軸方向約8cmを測る。背面に自然面が残り、石質から打撃面は階段状の破裂痕をのこす。また腹面は1方向からの单裂で、両面とも2次加工はみられない。2は1と同様、D区の5層に出土したもの。石質は安山岩で、2次加工はみられない。3はADベルトの6層から出土した花崗岩質のもので、破裂面は腐朽のために磨耗する。意図的な2次加工はみられない。

4は、安山岩質のもので、楔形石器。背面に1部連続的な細部加工がみられることから、楔形のものを再割して加工したものであろう。5も4と同様、楔形石器といえるものであるが軸が、短いことからみて、割裂したものであるかも知れない。6から8は、安山岩質の剥片で、うち6はD区5層、7はSK16に共伴し、8はC区6層に出土したものであるが、いずれも2次的な加工はみられない。



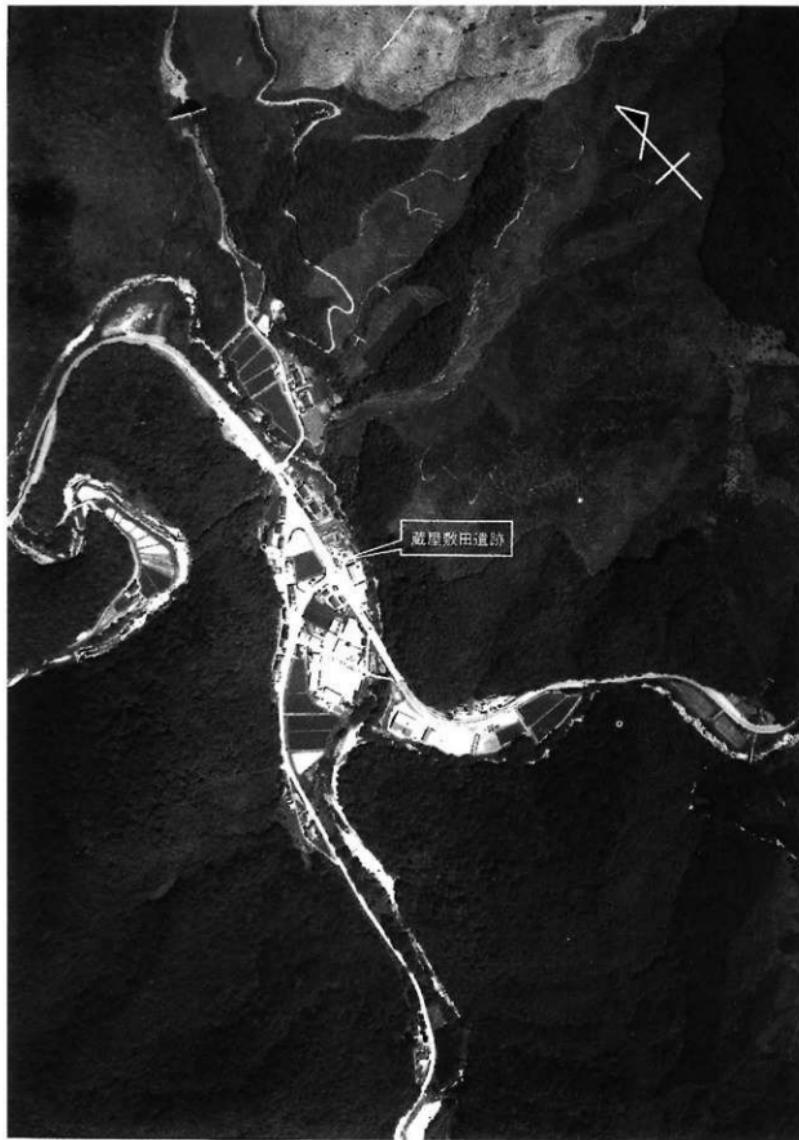
第13図 石器実測図

9はB区5層に出土した石鎌。石質は安山岩質のもので、基部に円形の快入がみられ、その径8mm、器長14mmを測る。背面に極浅の剥離がゆきとどいているが、腹面は平坦的であるために、側縁に細部調整が施されているといった程度で、重さ4gを量る小型のもである。

10から13は、いずれも黒色系の黒耀石で、10はC区の6層、11はD区の5層、12はC区の5層、13はAの5層に出土した剥片であるが、大半はC区で発見されているという傾向がみられた。

(渡辺)

図版 1



調査地点鳥瞰



1. 上流側から調査地点（北西から）



2. 調査地点近景（南西から）



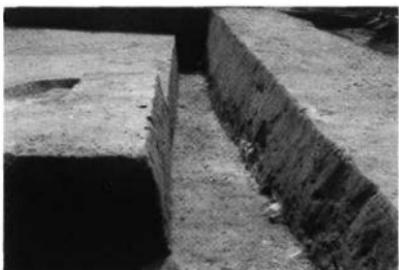
3. 発掘調査風景



4. A 調査区の西壁の堆積状況



5. D 調査区の西壁の堆積状況



6. 東西 トレンチの北壁の堆積状況

図版 3



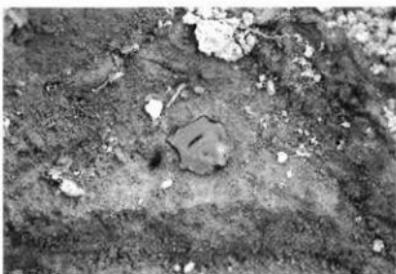
1. 押型文土器の出土状況（C 調査区）



2. 純文土器の出土状況（D 調査区）



3. 石鏃の出土状況



4. 黒縞石の出土状況



5. P01～03・SK05土坑の表出状況（A 調査区）



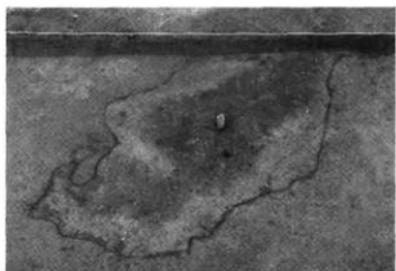
6. SK06・SK07土坑の表出状況（A・D 調査区）



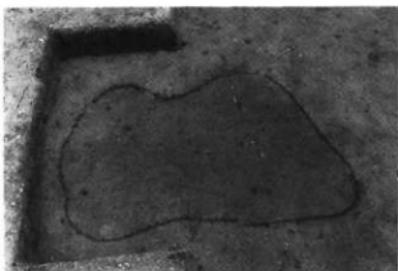
1. SK11土坑の表出状況（B調査区）



2. SK12土坑の表出状況（C調査区）



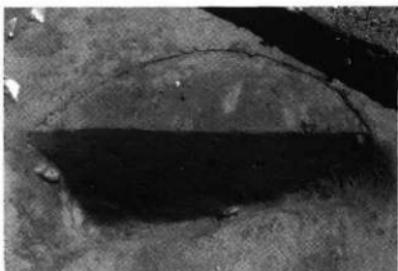
3. SK13土坑の表出状況（D調査区）



4. SK15土坑の表出状況（D調査区）

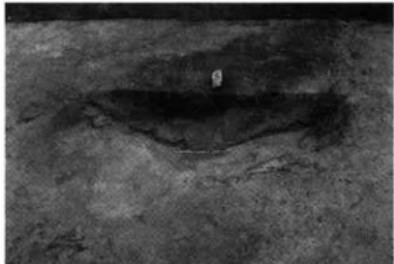


5. SK04土坑の半截状況（A調査区）

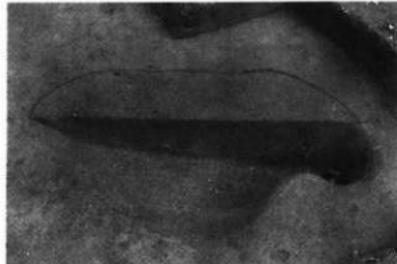


6. SK10土坑の半截状況（B調査区）

図版5



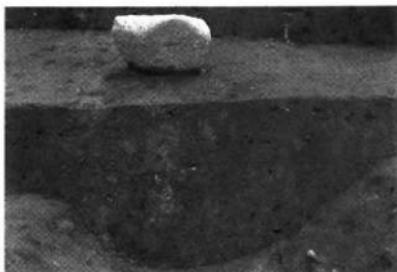
1. SK13土坑の半截状況（D調査区）



2. SK15土坑の半截状況（D調査区）



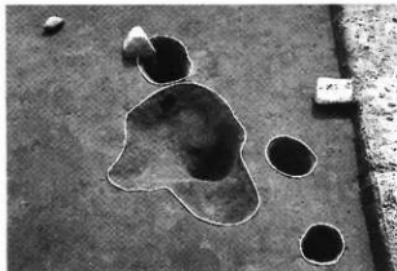
3. SK16土坑の半截状況（D調査区）



4. 著しく焼土がみられたSK16土坑の半截部（D調査区）



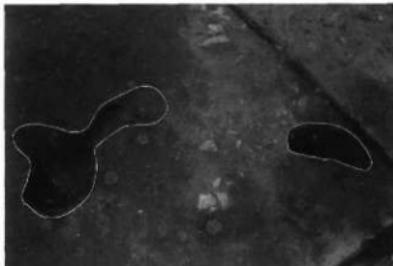
5. SK02~04土坑の完掘状況（A調査区）



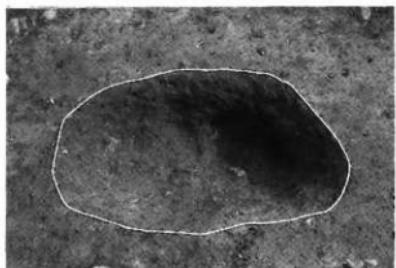
6. P01~03・SK05土坑の完掘状況（A調査区）



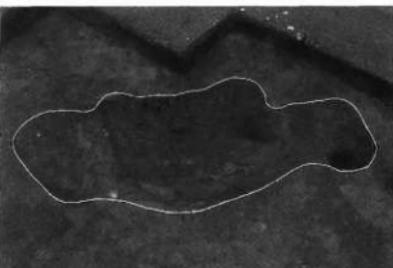
1. P04・SK06・SK07土坑の完掘状況（A・D調査区）



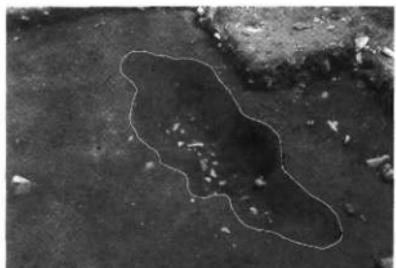
2. SK09・SK10土坑の完掘状況（B調査区）



3. SK12土坑の完掘状況（C調査区）



4. SK13土坑の完掘状況（D調査区）



5. SK16土坑の完掘状況（D調査区）



6. 実測風景

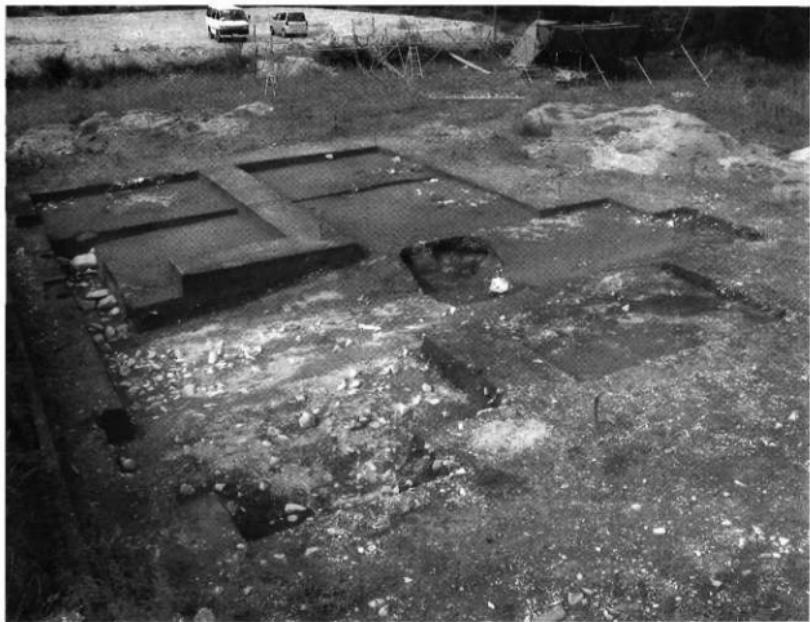
図版7



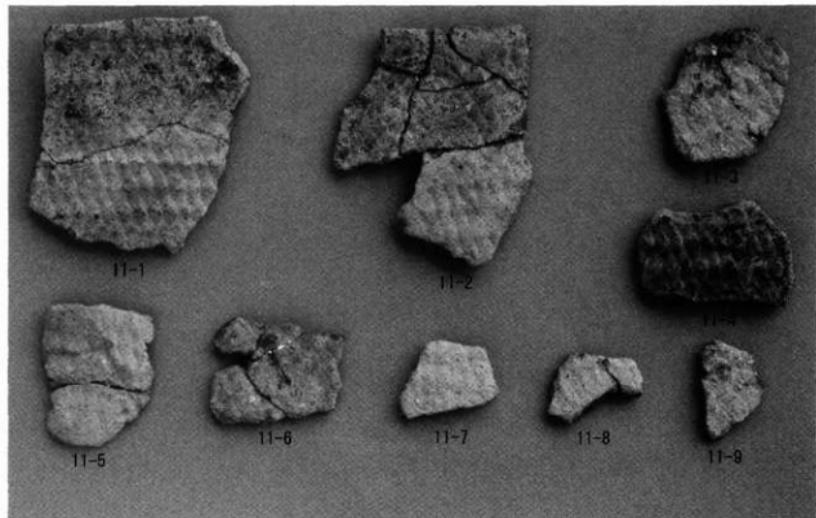
1. A・B調査区の完掘状況（東北東から）



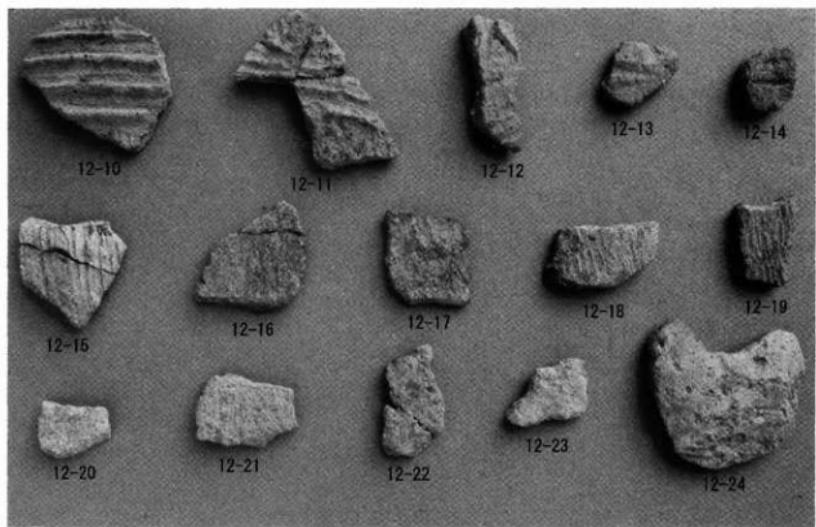
2. C・D調査区の完掘状況（東北東から）



3. 南西からみた全調査区の完掘状況

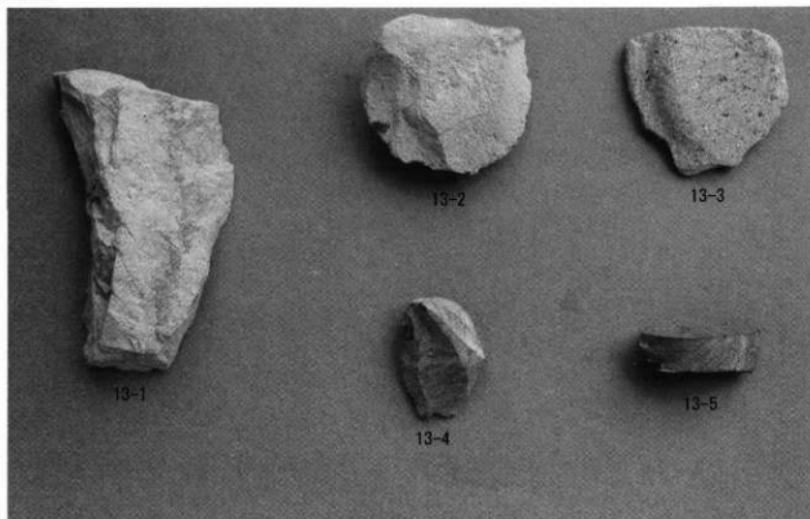


1. 実測土器類 (1)

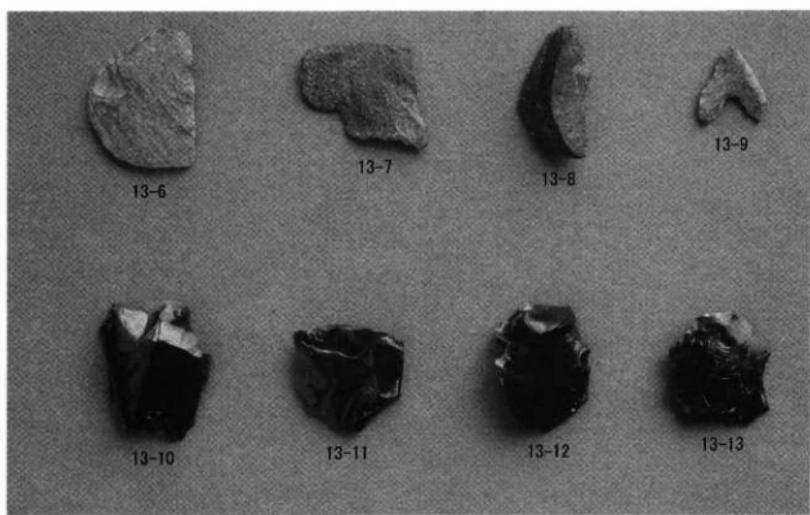


2. 実測土器類 (2)

図版 9



1. 実測石器類（1）



2. 実測石器類（2）

平成17年3月18日 印刷
平成17年3月25日 発行

益田市匹見埋蔵文化財調査報告第48集

一国道191号道川工区特定交通安全施設等整備事業に伴う一
藏屋敷田遺跡調査報告書

発行 益田市教育委員会
島根県益田市常盤町1番1号

印刷 西村印刷所
